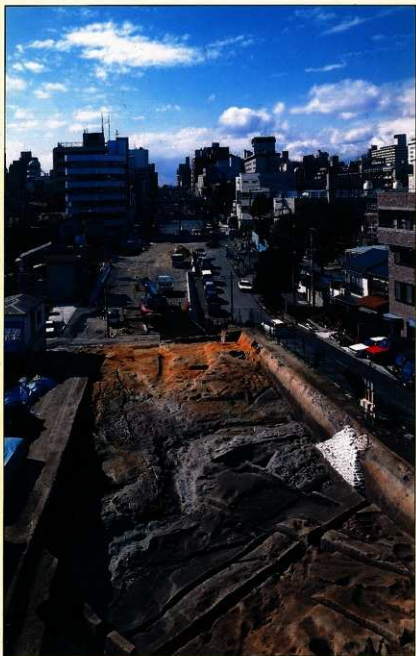


跡 遺 谷 工 細





調査地全景（東から）

細工谷遺跡の発見と調査

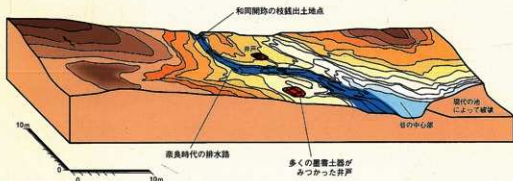
細工谷遺跡は大阪市天王寺区細工谷にあります。1996年6月、市道の延長工事に先立って小規模な調査を行なったところ、古代の遺跡の存在が明らかになりました。同年10月から本格的な発掘作業を開始し、翌年の9月までに約2000㎡を調査しました。



調査地のすぐ西隣は難波京のメインストリートである朱雀大路と推定されています。また、南西1kmには四天王寺、南東400mには堂ヶ芝廃寺があり、細工谷遺跡は難波京の中央部にあたります。

細工谷の地名が示すように、調査地の中央で北西から南東方向に伸びる谷地形が見つかりました。これは大阪の背骨にあたる上町台地の東斜面に刻まれた谷のひとつです。ここには弥生時代から江戸時代にかけての土砂が厚く堆積しており、平安時代の中頃以降は田や畑として土地利用されていたことがわかりました。

飛鳥・奈良時代の生活面は現在の地面から1~4m下で見つかりました。この地層に至ってからは土器や瓦が続々と発見されるようになり、調査現場はにわかに慌たしくなりました。そして、調査地中央を横断し、谷の中心部に流れ込む奈良時代の排水路を掘り始めた時、誰も予期していなかった発見にめぐり逢うことになったのです。



—飛鳥・奈良時代の地形—

古代の造幣局か？ ～ 和同開珎の枝銭発見の衝撃 ～

1997年1月30日、排水路の底近くまで掘り進んだ時のことでした。あかがね色に輝く見慣れない遺物が顔をのぞかせました。よく見ると、金属の棒に銭が数枚くっついていました。銭の部分には文字はみえません。現場の事務所から鏡を持ってきて裏側に差し込むと、「和同開珎」の四文字がはっきりと読めました。国内初の出土となった和同開珎の枝銭発見の瞬間です。

日本最初の鑄造貨幣としてよく知られている和同開珎は粘土や砂でできた鑄型に銅を流し込んで作られます。鑄型から取り外されたものは湯道(鑄棒)と銭がくっついており、形が枝に似ていることから枝銭と呼ばれます。

発見された枝銭は鑄棒とその左右1列に3枚づつ並んだ銭からなり、長さ11.3cm、重さ78.9gあります。これまで見つかった鑄型には和同開珎が2列以上ならんだものがあり、本来はさらに左右に銭が連なっていたのかも知れません。枝銭の先端は切り取られており、完成品の銭となった可能性があります。湯回りが悪くて製品化できなかった部分が枝銭として残ったのでしょう。

では、なぜ、枝銭が出土したのでしょうか。どこか遠くから運ばれてきたのか、それとも近くで作られていたのでしょうか？排水路からは枝銭のほかに土器・瓦・木筒、和同開珎40数枚・ベルト金具・耳環・匙・鏡・板の切り屑などの銅製品、埴輪や金属をはさむ道具である金鉗・斧先・釘などの鉄製品が発見されました。工具や銅板の切り屑が見つかったことから、金属製品を作る工房が調査地の近くにあったことは間違いありません。

ベルト金具などの銅製品はいずれも完成品で当時使用されたものです。おそらく、不用品となってから、新



枝銭の出土状況



たな銅製品をつくるためにスクラップとして持ち込まれたものと思われま。細工谷遺跡で見つかった銅製品のうち完成品でないものは枝銭と鑄バリのついた和同開珎だけです。この状況だけを見れば、細工谷で和同開珎が製造されていた可能性は十分に考えられます。

しかし、細工谷遺跡に古代の造幣局があったとするには、なおいくつかの疑問があります。和同開珎は専門の役所の厳密な監督のもとで製造されたことが当時の文献に記されています。製造所は河内・近江・九州の太宰府・長門・山城に置かれていましたが、難波の名はありません。このことから細工谷遺跡を当時流行した贗金づくりの跡ではないか、という考え方も登場してきます。

さらに、細工谷遺跡の性格を考える上で、枝銭以外にもう一つ重要な発見が後に続くことになるのです。





未知の寺院「百済尼寺」の発見

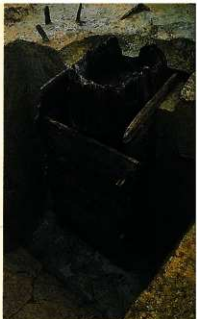
調査が始まってしばらくたち、平安時代の地層に入ってから、多数の瓦が発見され始めました。瓦は飛鳥時代のものが多く、その時代に建てられて、平安時代まで続いた寺院が近くにあったことが予想されました。

枝銭発見の興奮から2ヵ月近くがたって、調査終盤に入ったころ、私たちは調査地南寄りの井戸の調査に集中していました。この井戸は奈良時代の終り頃に使われなくなったものでした。深さ約3m近くあり、長さ1.2mの厚い板を6段分組んだ立派な井戸です。井戸の底近くからは墨で文字の書かれた土器が多数見つかりました。使われなくなった井戸を鎮めるための儀式に用いられたものでしょう。土器には「百済尼」・「百尼」・「尼寺」と書かれたものがあり、瓦から想定された寺院は「百済尼寺」というべき名であることがわかったのです。

「百済尼寺」の名があらわれ、さらに明らかになったことがあります。細工谷遺跡の南東400mにある堂ヶ芝廃寺はこれまで文献に登場する「難波百済寺」とする仮説がありました。「百済尼寺」の発見はこの仮説の正しさを証明するとともに、この地域に百済寺と「百済尼寺」の二つがセットで建てられたことがわかったのです。

調査地の近くは古代百済郡と呼ばれ、朝鮮半島にあった百済の王族の末裔である百済王氏の本拠地となったところでした。「百済尼寺」・百済寺はこの百済王氏によって造営された寺院であったと考えられます。

都の中軸線近くに「百済尼寺」・百済寺・四天王寺・摂津国分寺という四つの寺院が並んでいた景観は、さぞ壮観であったに違いありません。



墨書土器の見つかった井戸



「百済尼」・「百尼」・「尼寺」と書かれた器

細工谷遺跡の謎



枝銭と「百済尼寺」という未曾有の発見に恵まれたわけですが、この二つの発見をどのようにすればうまく説明できるのか、私たちは悩んでいます。枝銭が発見された排水路の上流には、工房と寺院という、まったく別の二つの施設があるのか。「百済尼寺」で銭を作っていたのか。枝銭もほかの銅製品と同じように「百済尼寺」で用いる梵鐘などの銅製品を作るための材料に過ぎないのか、などなど。そもそも、なぜ、枝銭はリサイクルされずに捨てられたのでしょうか？細工谷遺跡の調査は大きな発見とともに、新たな謎をうみ出しました。

調査地は当時の人々の活動の中心からは少し外れたところにあたと私たちは考えています。おそらく、調査地の北側か北西側に工房と「百済尼寺」はあったのでしょうか。

細工谷遺跡からはこれまで紹介してきた資料以外にも、約100点の母書土器、木簡、建築材料、当時の環境を知るうえで重要な種子などが、谷を埋めた厚い土砂に守られたおかげで、良好な保存状態で発見されました。また、これまで4例しか出土しておらず、謎の多い富本銭も見つかっています。

こうした資料はこのリーフレットを作成している現在、まだ整理の途中です。今後、調査と分析を進めていくことによって、徐々にこの遺跡の全容とともに難波京のようすが明らかになっていくことでしょう。



「細工谷遺跡」

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会
〒540 大阪市中央区法円坂1-1-35
大阪市立中央青年センター6F
TEL 06-943-6833 FAX 06-920-2272
1997年10月18日